

総合需給率は1%伸びたが

## カロリーは17年ぶりに低下

～49年度の食糧需給速報にみる～

最近食糧問題が改めて注目されているが、昨年11月14日、農林省は49年度の食糧需給表(速報)を発表した。

これはあらゆる食料品の国内生産、輸入、在庫などの分析を通じて、国民1人当りに供給された食料と、その栄養量を明らかにしたものである。

49年度の特長としては、戦後始めてのマイナス成長と物価高騰をバックに、① 供給カロリーが17年ぶりに前年を下回った。② 供給カロリーに占めるでん粉質食料の割合は、このところほぼ一貫して減り続けてきたのが前年水準を維持し、初めて低下に歯どめがかかった。③ 増加傾向を続けてきた砂糖類が、大巾な減少となった。などが目立っている。

また、米が大豊作で過剰となった42年を例外として、この10数年ずっと低下してきた食糧の総合自給率が、前年の71%から72%となり、1%上昇したことも注目されているが、これは、国内生産が増えたからではなくて、不況下の需要減によって、食料品の輸入が減ったためである。

速報のあらましは大体次のとおりである。

### 〔全体の傾向〕

昭和49年度の経済は、戦後初めてのマイナス成長を経験し、不況が深刻化した。一方、物価は狂乱物価が尾を引き、食料は前年度にくらべ24.1%も上昇した。

このため、実質所得は伸び悩み、家計の中の食料生産は前年度とほぼ同水準にとどまり、輸入食料農産物は約7%も減って、1人当たり食料供給量も減少した。

### 〔食料〕

国民1人、1年当たりの供給純食料(家庭の台所、食堂の調理場まで届いた量で、必ずしも実際に食べられた量ではない。)を主な品目についてみていくと一米は1%減って90.1キロになった。

41年度以降横ばいの小麦は0.6%とわずかながら増加。

野菜、果実は天候の影響でかなり減少。

肉類は3.7%増加したが、伸び率そのものは従来にくらべかなり低下した。

動物性油脂が12.5%と大巾な減少となったのが目立つ。

また、牛乳、乳製品は初めて前年度を下回ったが、これはバターと母乳見直しの空気の高まりで育児用粉乳が減ったことが大きい。

増加基調を続けてきた砂糖類は3.9%と大巾に減った。

高値のほか、節約ムードの中で菓子や清涼飲料等の需要が減ったことが響いたとみられる。

魚介類は最近の傾向を持続して2%の増加。

### 〔熱量〕

国民1人、1日当たりの供給熱量は2,502カロリーで48年度より20カロリー(0.8%)減った。供給熱量が前年度を下回ったのは、なべ底景気といわれた33年以来的ことである。

これは、従来高い伸び率を保ってきた油脂類の上昇率が大中に鈍化したことと、砂糖の減少によるところが大きい。

でん粉質食料からの供給熱量は、前年度より11カロリー(0.9%)減ったものの、全体も減っているので、総供給熱量に占めるでん粉質食料の比率は、前年度と同じ52%だった。

この比率はこの10数年減り続けてきていたもので、それがストップしたのは初めてである。

畜産物はほぼ横ばい。

### 〔診断〕

こうした現象について、農林省の関係筋では次のように云っている。

「供給カロリーが17年振りに低下したが、日本人の栄養水準は、すでにかんがりの高さに達している。今回の低下の主因は砂糖と動物性油脂が減ったことだが、植物性油脂はかえて増えており、むしろ、バランスのとれた内容といえることができる。したがって、栄養的に悪くなったということにはつながらない。」

あとかき 1976年の新年おめでとうございます。

昨年はいろいろご面倒をおかけ致しましたが、どうか本年もよろしくお引回わしのほど、お願い致します。

約24兆3,000億円にのぼる政府予算が決定しました。農林省予算は総額2兆4,129億円余ですがこのうちには、9,087億9,600万円の食糧管理特別会計関係の予算が含まれています。

これらの中で最も注目されるのは、既存の政府関係機関を拡充して、大豆、飼料穀物の備蓄を行なおうという約20億円です。しかし備蓄とは云うものの、農林省が当初考えていた「農産物輸入・備蓄法案」による国家備蓄ではなく、民間備蓄に対して、国が発言権を保持できる形の、いわば公的備蓄に切りかえられたのですが、いわゆる米以外の食糧、飼料穀物の備蓄体形造りができたという点で注目すべきで、ただ問題は食肉関係やその他の重要物資に対する既存の政府機関の物資買付けや放出があまり良い実績を残してきていないだけに、同じ轍を踏むのではないかという感も起りますが一果してどうでしょうか。(K生)